

## 普通の僕と特別な君

県立鹿児島南高等学校 二年

福田陽和

始業式の朝、いつも通り一番乗りで教室に入った僕は、大人しく本を読んでいた。野球部やサッカー部などのいない静かな教室がとても居心地がいいと思いつつ、ページをめくっていく。身長、成績、運動神経など全てが平均的で、クラスではあまり目立つことなく普段から大人しく本を読む高校生二年生。これが僕、梅島悠斗という男である。

どれほど時間がたったのだろうか。廊下に人がちらほら現れてきた。そしてついに僕の教室にも誰か入ってきた。そして隣の席に座ると、

「それなんて言う本？」

と話しかけてきた。とりあえず本の題名を教えると、「へえ、知らない題名の本だ」というか、昔と比べて大人しい雰囲気だね」

ここで僕は気が付いた。この声は幼馴染でよく一緒に遊んでいたあいつの声に似ている。もしかしてと思い振り向くと、「久しぶりだね。元気にしてた？」

と昔と変わらない笑顔とともにそう言った。

親の都合により二年生から違う高校に通うことになった私、初島亜理紗は転校の手続き時にあらかじめ教えられた教室に入った。着席時間まではまだ三十分もあり、誰もいない事を祈りながら教室に入ったが、読書をしている男子がいる。とりあえず自分の席を確認すると例の男子がとなりだった。口数少なそうだし話しかけづらそうだな、と思いつつ近づくと、小さい頃、毎日のように遊んでいた懐かしい顔がそこにあつた。遊んでばかりで勉強や読書は一切していなかったあの頃と比べると、人違いかと思うほど読書に集中していて、声をかけようか迷ったが、思い切って声をかけた。

「それなんて言う本？」

「亜理紗？　なんでここに帰って来たんだ？」

驚きすぎて声が出なかった僕は落ち着いてからこう聞いた。まさかこんな所で再会するとは思っていなかった。亜理紗の母親からは、

「また会えることはないかもしれない」

とだけ聞いていて、転校した理由などは聞いていなかった。だから今この場に現れたことが夢じゃないかと思うほどだ。

「あんまり詳しいことは言えないんだけど、遠く離れた所に引っ越したんだよね。でも引っ越した先での用事が終わって帰ってくるのができたの」

亜理紗はこう答えた。僕はこの答えにいくつか疑問を残し

つつ、一番気になった事を聞いた。

「また引越したりするのか？」

「今のところはその予定は無いよ。だからまた一緒に遊べるね」

そう言って亜理紗は優しく笑った。

亜理紗が転校してきた日の午後、午前授業だったので近所のカフェで話をする事になった。と言っても二人きりではなくクラスの友達も一緒だ。

「初島さんは悠斗さんと幼馴染なの？」

そう聞いたのは去年からの付き合いである神山美咲である。

今一緒にいる関口翔太郎の彼女でもある。

「そうだよ。悠斗とは小三の頃までずっと一緒にいたの」

「そうなんだ！　じゃあ久しぶりに再会できたんだね。よかったじゃん！」

と女子同士、早速盛り上がっている。どこに住んでいるのか、趣味は何かなど亜理紗が質問攻めにあっている状況だ。

そんな中、男子二人は本を読んでいた。僕と翔太郎は近所の古本屋でたまたま出会い、たまに喋るくらいの仲だった。今は図書館やカフェで一緒に本を読みに行くほどになっている。

一冊読み終わり、女子の方を見てみると、まだ話が続いている。コーヒーが飲みたくなり、コーヒーを頼むと、

「僕も」

と翔太郎も同じものを注文した。

「お前ってコーヒー飲めるんだな。普段は甘党だから意外だわ」

甘いものばかり食べている翔太郎がコーヒーを頼んだ事が意外過ぎて思わず聞いてみた。

「コーヒーぐらい飲めるし。今日は徹夜して眠いから飲もうと思って」

どうやら徹夜をしていたらしい。会話が終わってちやうどのタイミングでコーヒーが運ばれてきた。コーヒーを飲もうと口に含んだ時、翔太郎が質問をしてきた。

「気になったんだけど、悠斗って初島さんのことが好きなのか？」

僕はコーヒーを吹いた。いきなりの質問である。

転校初日の午後、私は悠斗に誘われて近所のカフェに来ていた。本当は二人っきりで話があったのだが、悠斗の友達の間口さんと彼女の神山さんも一緒にいる。

「初めまして。私、神山美咲。これからよろしくね！」

「私は初島亜理紗。こ、こちらこそよろしく」

初めはお互いにちょっと距離があったが、少し経つと慣れていき、

「亜理紗ちゃんはどこら辺に住んでるの？」

「私は学校近くのコンビニ辺りに住んでるよ。美咲ちゃんは？」

「私？　私は駅の近くの……」

と会話が弾んでいる。こんなに会話をしたのは久しぶりで結構な時間が過ぎていた。本を読んでいた男子も読み終わってコーヒーを注文したようだ。昔一緒に遊んでいた時と比べて男の子らしくなったなと思って悠斗を見ていたら目が合ってしまった。私はすぐに眼をそらした。悠斗はそこまで気にしていないようだ。ふと美咲ちゃんの方を見てみると、

「亜理紗ちゃん、さっき悠斗くんの方見てたよね？」

「う、うん。どうしたの？」

「いや、顔真っ赤になってるよ。もしかして悠斗君の事好きなの？」

私は恥ずかしくて顔を伏せた。きっと耳まで赤くなっていただろう。

暗くなり始めたので今日は解散になった。翔太郎と美咲さんは一緒に帰るらしく、カフェ前には僕と亜理紗が取り残された。

「なあ亜理紗。家ってどこら辺？」

家に帰っても暇なので送ることにした。

「いいの？ 悠斗の家って逆方向じゃなかったっけ？」

「いいよ。家帰っても暇だしな」

「じゃあ、お願いしようかな」

カフェで美咲ちゃんや関口くんと別れた後、悠斗に家まで送ってもらえることになった。昔はよく一緒に帰っていたは

ずなのになぜか緊張してしまって、なかなか喋れない。そんな中、悠斗が、

「亜理紗と久しぶりに会ったけど、前より大人っぽくなったよな」

なんて言うから恥ずかしくなってしまった。

「あ、あのさ悠斗。わ、私用事思い出したから急いで帰らないといけないんだった」

なんとありきたりな言い訳なんだろうか。でも悠斗は、

「そうなのか。じゃあ気を付けて帰れよ」

悠斗はほんとにずるいと思いつつ、

「うん。今日はありがとう」

そう言って悠斗と別れた。別れた後に連絡先の交換を忘れていたのに気が付いてちよつとがっかりしつつ、転校初日は幕を閉じた。

一学期は特に大したイベントもなく、亜理紗とはちよくちよく目が合うだけで、他のクラスメイトと過ごしていた。期末考査はぎりぎりで補習は免れ、終業式がきた。長い校長の話を右から左に聞き流しながら、最近の亜理紗の行動について考えていた。

期末考査が終わり、夏休みがくるということで私は悠斗とどこかに遊びに行きたいと考えていた。でもいざ誘おうとしても悠斗の周りには男子たちがたくさんいる。だから私は

遠くから隙を見て誘おうと思っていた。でも隙がない。朝は遅刻気味でしゃべりかける暇がない。休み時間は男子と喋っているか寝ているかの二択。帰りはゲーセンに行っているらしくすぐに帰ってしまう。タイミングが無いなと思っただら終業式がきてしまった。始業式以降話ができていないから、連絡先も知らない。だから夏休みに遊ぶためには今日中に連絡先を交換しないといけない。だから私は終業式の後に勇気を出して話しかけてみることにした。

校長の話聞き流しながら亜理紗のことを考えていると、いつの間にか終業式は終わっていた。クラスのいつも一緒にいるメンバーと一緒に教室に帰っているとまた亜理紗と目が合った。だけど今日の亜理紗はいつもと違った。こっちに来たのだ。

「ねえ悠斗。今日の放課後って空いてるかな？」

「えっ、空いてるけど？」

「なら一緒に帰らない？ ちょっと話したいことがあって」

「そうか。じゃあ、久しぶりに一緒に帰るか」

「うん。絶対だからね」

亜理紗はそう言って小走りで逃げてしまった。一緒にいたいつものメンバーが、

「おっ、告白かな」

と考えないようにしていたことをボソツと言ったせいで、僕は何とも言えない気持ちになっていた。

担任の長話のせいで予定より延びたホームルームが終わり、いよいよ放課後がやってきた。やっと悠斗と帰れると思うと嬉しくて仕方がなかった。気持ちを切り替えて悠斗の席に行くと、悠斗はちょっと照れている気がした。周りの人に茶化されたのだろう。申し訳ないなと思いつつ、私は今日まで言えなかったことを言った。

「悠斗。帰ろうか」

ただの終業式の放課後のはずなのに、どうしても緊張してしまっていた。一番の理由は隣を歩く亜理紗である。亜理紗に帰りを誘われたとき、周りの友達が、

「おっ、告白かな」

って言ったのが気になってしょうがなかった。でも亜理紗にとって僕はただの幼馴染である。そんなことは無いだろう。

「なあ亜理紗。なんで今日は帰り誘ったんだ？」

「あ、あのね、連絡先交換しない？」

「連絡先？ いいけど」

「やった！ じゃあ交換しよう」

というところでまずは連絡先を交換した。そういえばこの前会ったときに連絡先の交換を忘れていた。

「連絡先の交換なら学校でもしたのに」

「いや、悠斗は学校でいつも誰かと一緒にいるじゃん。だからちょっと話しかけづらくてね」

「そっか。クラスの人にはまだ慣れないか」

「うん。ちょっとまだ苦手かな」

「じゃあ慣れてかないとだね。いつも元気すぎる奴らだけど、根はみんないいから」

「うん。ありがと。あ、ここ。私の家」

「いや僕の家と近すぎだろ」

「でしょ。たまたまだからね？」

「そういうことにしとく」

「本当だからね」

「はいはい。じゃあな」

「うん。じゃあね」

「あつ、あと私は悠斗ともっと話したいんだからね」

僕はただの幼馴染の亜理紗にドキツとしてしまった。

終業式の日の夜、僕は布団にはいつてゲームをしていた。

僕はほとんどの人のラインなどは通知を切っている。だからマナーモードにしてゲームをしたりはしないのだが、今日は珍しく通知がきた。亜理紗からだ。別れた時のあのセリフが脳裏をよぎって一瞬固まってしまい、気が付くと敵に倒されていた。どんな内容か気になるし、タイピングもいいので亜理紗からのラインを見てみることにした。内容はというと、夏休みのどこかで二人で遊びに行こうということだった。遊びに行くのは構わないのだが、流石に二人で行くのは恥ずかしい。でも亜理紗のために行くことにした。夏休み一の楽しみなイベントになりそうだ。

終業式の日の夜、私は悠斗に夏休み一緒に遊ばないか聞こうとして文字を打っては迷って消すを繰り返していた。流石に高校生ということもあって二人で遊びに行くのはカッブルと間違われそうだし、悠斗も恥ずかしがるだろう。でも他の喋れない人が一緒にいて悠斗を独り占めされるのも嫌だから、やっぱり二人で行きたい。私は勇気を出してラインを送る。「せっかくの夏休みだし、二人で遊びに行かないかな」と送った。ほんの数分で返信が来た。「いいよ。僕はいつでも暇だよ。」私は嬉しすぎて思わず抱き枕に抱き付いた。

夏休みが始まり数日後、悠斗と遊ぶ日が来た。今回は遊びに行く所を水族館にしてみた。昔から二人で行ってみたい場所の一つだ。ショッピングモールや遊園地よりは知り合いと会うことは無いだろうという期待も込めていたりもする。私は初めておしやれを試してみた。普段は部屋着で外に出ている上に出かけるのはコンビニばかりなので、人が多い場所に行くのは緊張するかと思ってたけど、遊ぶのが楽しみすぎて緊張なんて忘れていた。

待ち合わせ場所に先に着いたのは僕だった。まあ待ち合わせ予定の時間より三十分ほど早く着いてしまった。遅れたらいけないなと思ったらこうなっていた。ぼーっとしながら待っていると僕の方に向かって歩いてくるきれいな人がいる。

まさかと思っていたら亜理紗だった。周りの人も亜理紗の方  
を見ている。僕はこの場所から早く離れたくなったのでこう  
言った。

「おなかすいたから早く行こう」

今回の集合時間は朝からではなく、なぜか昼前からだった。

お昼ご飯の時に悲劇は起きた。僕たちは待ち合わせ場所の  
近くのカフェに入って昼食をとっていた。カフェの中は少し  
混雑していたが、ちょうど二人席が空いていて亜理紗とは対  
面になる感じで座っている。注文したサンドイッチセットが  
届き、お互い食べ始めた。緊張からかいつものように喋れず、  
サンドイッチを食べきってしまった。僕はそろそろ亜理紗に  
話しかけようと思った時、ちょうど亜理紗が話しかけてきた。  
「周りの人たちからどう見られてると思う？ やっぱりデー  
トだっと思われるのかな？」

勘違いしたくないから考えないようにしていた『デート』  
という単語がいきなり、しかも亜理紗から出てくるとは思っ  
ていなかった。平常心を装いながら、

「そう思われても仕方ないな。ただの幼馴染だけど」

と返した。落ち着くためにコーヒーを飲みながら自分にそ  
う言い聞かせた。これは数年ぶりに再会した幼馴染と遊んで  
いるだけで、別に付き合っているわけでも、デートをしてい  
るわけでもない。言い聞かせているといきなり、  
「別に私は悠斗の彼女と思われてもいいけどね」

と亜理紗は言った。唐突すぎて僕はあの時のようにコーヒ  
ーを吹き出した。

「コーヒーは少し亜理紗にかかってしまっていた。これはや  
ってしまっただけだ」と思い、

「亜理紗、ごめん」

とすぐさま謝ると、

「い、いや、こちらこそごめん。変な冗談なんか言って」  
と返してきた。緊張でただでさえ喋りにくかったのに、さ  
らに気まづくなってしまう。とりあえず一旦カフェから出  
ることにした。

洋服が汚れてしまったからか、思ったよりダメージがあっ  
たらしく、亜理紗の表情はとても暗くなっていた。このまま  
だとまづいと思い、僕は一つ提案を出した。

「僕が汚しちゃったしき、お金は出すから洋服買いに行かな  
い？」

家においても暇だからと言う理由でバイトしていたため、洋  
服を一着買う分には十分なほどのお金が財布には入っている。  
「流石にそれは申し訳なきすぎるよ。元はと言えば私が冗談  
言わなきゃよかったんだし……」

なんて言う亜理紗の手を取り、僕は近くの服屋に連れて行  
った。

服屋に連れて行かれた私は頭の中がこんがらがっていた。  
「別に私は悠斗の彼女と思われてもいいけどね」というのは

本心なので、冗談ではないのだが、こんな反応が来るとは思っていない。もしここまで頑張ったのにただの幼馴染としてしか見られてないのかと思うと不安になっていた。一人でウキウキしていたのが馬鹿みたいだ。いろいろと考えてると悠斗が、「亜理紗、これとか似合うと思うけどどう？」

と話しかけてくる。一生懸命話しかけてくれる悠斗に申し訳なさを感じつつ振り向くと、悠斗が持ってきたのは純白のワンピースだった。私は普段ワンピースを買わない。これまで一度も着たことがないジャンルの服だ。私は悠斗を選んでくれたワンピースを着ることにした。でも、ただ「それにする」とも言いたくないので、「悠斗ってこういうワンピース系が好きなの？」と聞いてみる。

「ま、まあな。でも今回は亜理紗に似合いそうだからって理由で選んだし」

目をそらしながら悠斗は答えた。

「ワンピースね……」

「駄目、か」

悩んでる風に装うと悠斗は諦めたように持ってるワンピースを元の位置に置きに行った。私はこれを待っていた。悠斗に小走りで近づくと、持っていたワンピースを取って、「悠斗が選んでくれたワンピース、着てあげる。もし似合っ

てなかったら許さないから」

そう笑顔で言った。悠斗の嬉しそうなあの顔は絶対忘れない。

亜理紗に洋服を買ったあと、最初の目的だった水族館に行った。水族館では亜理紗のテンションが上がり、周りの子ども達よりはしゃいでいたくらいである。水族館からの帰り、電車で揺られていると亜理紗は大きくあくびをした。歩き回ったので疲れたんだろう。

「亜理紗、眠いなら寝ていいぞ？ 駅に着く前に起こしてやるよ」

「いいの？ じゃあお言葉に甘えて……」

亜理紗はそう言うとすぐに眠りについた。僕たちが降りる駅まではまだ二十分はある。僕はスマホとイヤホンをかばんから取り出し音楽アプリを開いた。自動再生を選択すると恋愛ソングが一曲目に流れた。いつもは飛ばすが今日はなぜか最後まで聞こうと思った。僕にもたれ掛かって寝息を立てる亜理紗を改めて見ると、鼓動が早くなった気がした。

駅に着くと夕焼けで空が染まっていた。悠斗と別れる時が来た。電車を降りてから悠斗の様子がすこしおかしい気もしたが、きつと見間違いか何かだ。いつまでも突っ立っている訳にもいかないので、

「悠斗、今日はありがとね！ また今度も遊ぼうね」  
楽しい時間が続くわけではないので別れを告げる。

「お、おう。またな」

名残惜しくてゆっくり歩いてみると後ろから声をかけられた。悠斗からだ。

「あのさ、今日実は水族館でこれ買ったんだ」

そう言ってみせてきたのは小さなイルカのキーホルダーだった。

「高校生にもなって幼馴染同士が同じものってのもなんか幼いけど、これくらいはいいかなって」

「そうだね。ありがとう」

私はそれを受け取った。でもまだそれを身につける時じゃない。だから私は帰り着くと引き出しの奥底にそれをしまった。

夏休みが明け、体育祭、文化祭とイベントが続き、九月はあっという間に終わっていた。学校での亜理紗との距離は離れていた。どうやら体育祭、文化祭でクラスにも馴染んだようだ。十月も終盤になりテスト勉強から解放された僕と翔太郎は本屋に来ていた。

「そういえばさ、初島さんとはどうなの？」

こいつはいつも話が急である。

「亜理紗とはたまにラインで勉強を教え合うぐらいだけど」

「お、お前マジかよ」

「マジだどうした」

「夏休みは？ 流石にどっか遊びに行ったりはしたでしょ」

「したが……」

僕は翔太郎に夏休みに遊んだ時のことをすべて話した。

「なあ悠斗、一つ聞いていいか？ お前初島さんのこと好きだろ」

「好きなのかもしれない。目が合うと鼓動が早くなるし、頭の片隅ですつと亜理紗のことを考えてる。もちろん幼馴染としてじゃない」

「世間的にはそれを恋って言うんじゃないか」

「そうなのかもな」

「どうやらこれは恋らしい。」

私は美咲ちゃんとファミレスに来ていた。

「見て！ めっちゃこのパフェ大きいよ！」

「これ一人で食べれる？」

「大丈夫。いぎとなったら亜理紗ちゃんにも食べるの手伝ってもらうから」

「そんなに私食べれないからね」

私達は注文したデザートを食べながら雑談していた。

「最近悠斗くんとはどうなの？」

「たまに話すくらいかな」

「もつとグイグイ行けばいいのに」

「それができたら苦労してないよ……」

「いけるって。亜理紗ちゃんは知らないと思うけど、学年で男女ともにかわいいって人気なんだからね」

「そうなの？ そんなこと無いのに……」

「もっと自信持ちなよ。悠斗くんがこんなにかわいい幼馴染のこと好きにならないわけ無いじゃん」

「別にかわいくはないから。でもありがとう。ちょっと自信がついたよ」

「そう。なら良かった」

「でね、美咲ちゃん。一つ考えてることがあって……」

家に帰り着くと私は悠斗にラインを送った。「十月三十一日の夜って空いてる？ 私が引越す前、最後に二人で最後に会ったあの場所に来てほしい」と。あとは晴れるのを祈るだけだ。

亜理紗は僕をこの場所に呼び出した。空にはきれいに光る満月が浮いている。この場所は亜理紗が転校していなくなる前に最後に会った丘だ。ここはいつ来てもきれいな景色を見せてくれる。あの日、この場所でききなり亜理紗に転校のことを告げられ、お互い泣きじゃくった。あの日から僕はこの場所に来ていなかった。亜理紗のことを思い出しそうで寂しくなるからだ。地面に座り、夜空を見上げていると亜理紗が来た。僕が買った純白のワンピースを着て、ショルダーバッグにはイルカのキーホルダーがついている。

「待たせちゃってごめんね」

「大丈夫、そんなに待ってない。それで今日はどうした？」

「ねえ悠斗、今日ってブルームーンなんだって」

「そうらしいな。きれいな満月だ」

「悠斗と見るともっときれいに見える気がする」

「僕もだ」

冷たい秋風が吹く。だけど僕、いや僕たちにはそんな関係ない。

「また亜理紗と会えるとは思ってなかった」

「私も。今、こうして二人でこの場所にいることが嘘なんじゃないかってくらい嬉しい」

「安心しろ。夢じゃない」

「なら良かった」

僕は思う。この気持ちを伝えるのは今なんじゃないかと。

私は思う。この気持ちを伝えるのは今なんじゃないかと。

「亜理紗のことをずっと考えてしまう。目で追ってしまう。

先に言わせてくれ！僕は亜理紗のことが好きだ」

「私も。悠斗、私は悠斗のことが好き。もっと喋りたいし側についてほしい」

ここまで来たら後には引けない。でも引く必要なんて無い。

「だから亜理紗。僕と付き合ってください！」  
「ありがと悠斗。不束者だけど、お願いします」

月明かりが二人を照らす。